

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	中西 佳世子
論文題目	Hawthorne's Dual Narratives in His Four Romances: Providence and the Multiplicity of Its Literary Use （ホーソーンの4つのロマンスにおける二重のナラティブープロヴィデンスとその文学的機能の多様性ー）		
（論文内容の要旨） <p> ホーソーンは初期の作品から晩年の未完作品にいたるまでプロヴィデンスという言葉と概念を頻繁に用いており、プロヴィデンスはホーソーン作品に通底するテーマといえる。しかし、ホーソーンのプロヴィデンスを作品のテーマと技法の双方から総括的に論じた研究は未だほとんどなされていない。本論文は、プロヴィデンスの政治的・文化的言説に注目することにより、作家が創作した4つの長編作品における二重のナラティブ構造を分析し、また、この技法が作家のプロヴィデンスに基づく芸術観や人生観と深く結びついていることを論証している。 </p> <p> 本論文では、メインプロットとは別の表面下のプロットを持つナラティブを「二重のナラティブ」と定義し、4つの長編に共通する①序文における予告、②プロヴィデンスの概念を用いた物語の枠組み、③二重のナラティブと曖昧性（ambiguity）という技法を考察している。序章ではまず「人間にとっての偶然は神にとっての目的」（“Man’s accidents are God’s purposes”）という作家のプロヴィデンスに基づく信条に言及し、プロヴィデンスの歴史的背景を概観している。また、続く各章では、作品の枠組みとして用いられているプロヴィデンスの属性、プロヴィデンスによって解釈される出来事、そこで提示されるテーマと19世紀アメリカ社会のプロヴィデンス言説との関連性、に着目して考察を行なっている。 </p> <p> 本論文の各章の構成は、まず第1章において短編集を作家の長編創作のための実験と読みとして考察した上、第2章から第5章において創作年代順に作家の4つの長編すなわちロマンスを考察することにより、それらの技法がどのように発展完成されているかを論証している。具体的には、第1章では、短編集『旧牧師館の苔』を扱い、序章「旧牧師館」とその他の収録作品との間に構築されている有機的な関連を考察し、それが後のロマンスにおける長編創作の手法の実験であることを論証している。第2章は17世紀の清教徒の共同体を背景にした『緋文字』を扱い、この物語で曖昧性を生み出すプロヴィデンスの属性が物語の枠組みの構築に用いられていることを考察している。そして序章「税関」で提示される曖昧性のメカニズムが本体の物語で清教徒達によって繰り返される一方、表面下のプロットでは、この清教徒達の見方を変化させていくヘスターの戦略が展開される二重の構造が存在することを明らかにし、そこに19世紀中葉特有の、またホーソーンの作家としての自意識といったテーマが提示されていることを論証している。第3章はセイレムの旧家の歴史を描く『七破風の家』を扱い、そこでは歴史の支配者というプロヴィデンスの属性によって物語の枠組みが構築されていることを考察している。そして物語の「呪いの成就」と「呪いの解体」という、相反する流れが二重構造を形成し、19世紀の政治言説のアンチテーゼを提示していることを論証する。第4章は、作家のユートピア共同体への参加体験を基にし </p>			

た『ブライズデイル・ロマンス』を扱っている。ここでは、まず葡萄酒を熟成する酒の神が自然を司るプロヴィデンスの属性を体現し、劇場の劇を采配する演劇の神が地上を監視する目としてのプロヴィデンスの属性を体現していることを説明している。そして表面下のプロットでアイロニカルなバッカスの役割を担う語り手にそれらの属性が人格化されていることを考察し、この二重の構造によって、メインプロットで提示される社会改革運動批判、作家の実体験記録、禁酒法批判、ホーソーンの作家としての自意識という複数のテーマが統合されていることを論証している。第 5 章では作家のヨーロッパ体験を基に創作された『大理石の牧神』を扱っている。ここでは、プロヴィデンスと深く関わる宗教的思想である「幸運な墮落」が物語の枠組みに用いられ、二通りの「幸運な墮落」を巡る二重のナラティブが構築されていることを明らかにする。そしてその表面下のプロットで描かれる二人のアメリカ人に対する痛烈なアイロニーによって、作家のアイデンティティの危機と、南北戦争を目前にしたアメリカへの失望が提示されていることを論証している。

結論では、ホーソーンの 4 つのロマンスにおける手法とテーマをもう一度概観し、ホーソーンのプロヴィデンスが、創作の技法とテーマに深く関わる概念であり、作家の宗教観、人生観、芸術観と作品を有機的に統合する重要な概念であることを総括している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀中葉に創作したアメリカ人作家ナサニエル・ホーソーンの4つの作品を分析の対象としている。特に、プロヴィデンスという概念を政治的・文化的に用いた表現に注目して、作品における二重のナラティブ構造を明らかにすることを試みている。そもそもプロヴィデンス(「神意」)は、ホーソーンがその作家経歴の全域にわたって愛用した語であり、南北戦争前のアメリカ政治の場で活用されたキーワードであるにもかかわらず、これまでのホーソーン研究においては、彼の文学におけるプロヴィデンスの意味を体系的に論じたものがほとんど見当たらない。そうした点を考慮するとき、本論文の獨創性は高く評価されるべきものと考えられる。

本論文の序章では、まず「人間にとっての偶然は神にとっての目的」(“Man’s accidents are God’s purposes”)という作家の信条が述べられた経緯が明らかにされ、プロヴィデンスの歴史的背景を概観している。様々な資料が活用され、その上でこれまでの研究に欠けていた点を指摘しており、本論文の着眼点の重要性を強調している。

第1章では、短編集『旧牧師館の苔』が分析と対象となるが、特に序章「旧牧師館」とその他の収録作品との間に構築されている有機的な関連を明らかにした上で、その関連が後の長編の手法の実験と見なされることを論証している。第2章は『緋文字』を扱う。この物語の解釈においては、曖昧性(ambiguity)がしばしば問題とされるが、この章では、その曖昧性こそプロヴィデンスの属性が生み出すものであることを明らかにしている。『緋文字』には「税関」という長い序章が付されているが、この「税関」において提示される曖昧性のメカニズムが本体の物語において清教徒達によって繰り返されていることが指摘されている。また一方、表面下のプロットにおいては、ヘスターの戦略によって清教徒達の見方が変化させられていく。『緋文字』にはこのような二重の構造が存在することが明らかにされ、またそのような二重構造の中にホーソーンの家としての自意識というテーマが提示されていることが論証されている。

第3章では『七破風の家』が扱われている。セイレムの旧家の二世紀にわたる歴史を描くこの作品では、プロヴィデンスが歴史の支配者という属性を持ち、これによって物語の枠組みが構築されている、と論じている。物語の中には「呪いの成就」と「呪いの解体」という相反する流れが存在し、作品の二重構造を形成しているだけでなく、ホーソーンの時代の政治言説のアンチテーゼを提示していることが論証されている。第4章は『ブライズデイル・ロマンス』を扱っている。作家ホーソーン自身がブルック・ファームというユートピア共同体へ実際に参加し、挫折した体験を基に書かれたこの作品は、作家の社会意識や、後世の作家たちに影響を与えた視点の技法などの点から、これまで様々な論じられてきた。本論文ではプロヴィデンスという独自の観点から、従来にない指摘を行なっている。すなわち、まず葡萄酒を熟成する酒の神が自然を司るプロヴィデンスの属性を体現していること、また劇場の劇を采配する演劇の神こそプロヴィデンスの属性であり、この属性が地上を監視する目を体現していることを明らかにする。一方、表面下のプロットでは、プロヴィデンスの属性がバッカスのアイロニカルな役割を担う語り手に人格化されている、と指摘

する。さらには、この二重の構造によって、メインプロットで提示される複数のテーマが統合されていることを論証する。ワインと蒸留酒の比喻によって、社会改革には熟成が決め手とホーソーンがみなしていた論じる部分は、十分な説得力を持つ。

本論の最終章をなす第5章では、『大理石の牧神』が分析の対象とされる。この作品は、ホーソーンが作家としての後期に行なった数年にわたるヨーロッパ体験をもとに創作されたものであり、その完成度に対する疑問や、ロマンスというジャンルに収まりきれない要素の解釈など、批評家たちを困惑させてきた問題作である。この作品では、プロヴィデンスと深く関わる宗教的思想である「幸運な墮落」が物語の枠組みに用いられているが、本論文は、作品に二通りの「幸運な墮落」を巡る二重のナラティブが構築されていることを明らかにし、作品に対する統一的な解釈を試みている。作品の表面下のプロットにおいて二人のアメリカ人が痛烈なアイロニーにさらされているところに、作家ホーソーン自身のアイデンティティの危機と、南北戦争に突入していくアメリカへの失望が提示されている、と論じている。南北戦争前のアメリカにおける政治的言説とホーソーン文学との関わりを論じる部分、とりわけ民主主義と人間の「心」(the heart)との関連を論じる部分、ピューリタニズムを奉じるアメリカ人の偏狭な独善性を、カトリシズムを奉じるイタリア人との対照を通して指摘する部分、などは説得力に富む有益な知見である。

ホーソーンの家系経歴の全域を見ると、また南北戦争前のアメリカの政治情勢を考えると、プロヴィデンスという語の重要性は無視できない。そして、この重要なプロヴィデンスという概念を通して、『緋文字』をはじめとするこの作家の主要な4つの長編における曖昧性の構造、意味と緊密に関わり合い、作品中に二重の物語を作り上げていること、またそうした二重性を巧みに操りながらも、作家自身は「人間にとっての偶然は神にとっての目的」(Man's accidents are God's purposes.) という信念を踏み外していないこと、を本論文が丁寧に論証していることは、高く評価しうる。また、西部開拓と拡大主義に踊った時代の政治的言説を踏まえ、ホーソーン文学の曖昧性の構造と意味に光を当てた本論文は、十分なオリジナリティを備えており、4つの長編のそれぞれに新たな読みの可能性を提案している。

章によっては必ずしも論旨が明快に展開されていない箇所もあり、やや不満が残るが、論文全体としては統一的なまとまりを示しており、二重のナラティブ構造という概念を導入させることによって、従来ホーソーン文学の特質とされてきた曖昧性に新たな考察を加えた点は、申請者の今後の研究を十分期待させるものである。

以上のように、本学位論文は、人間とその社会を環境との関わりに沿って解明することを目指した人間・環境学研究科の理念に適ったものと言える。

よって、本論文は、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成22年8月12日(木)、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： _____年 _____月 _____日以降